



仲間との強い 絆づくりを



教育学部同窓会 会長
白杵 勇人

日ごろから教育学部同窓会の活動推進に格別のご理解とご協力を賜り深く感謝申し上げます。

昨年の新潟大学全学同窓会設立二十周年記念「交流会・講演会」の開催に当たり、記憶にも記録にも残る素晴らしい運営をしてくださった教育学部同窓会の関係者の皆様、そして大勢の同窓生の皆様からご参集いただき、心より感謝いたします。

さて、令和九年度は教育学部同窓会創立七十五周年となります。「仲間との強い絆づくり」をテーマに、大勢の皆様から参加していただける有意義な会にしようと三年計画を立てています。今日的な課題となっている特別支援教育や学級経営に特化した講演会も計画しています。昨年度は有川宏幸教授から「特別支援教育の現在、過去、未来」と題した講演をしていただきました。本年度は赤坂真二教授から「学級経営を学ぶ意味」と題して講演していただく予定です。詳細は後半のページやホームページをご覧ください。令和九年度は長澤正樹教授の特別支援教育の講演を予定しています。大勢の皆様の参加をお待ちしています。

さて、六月の評議会は昨年度に引き続き対面とオンラインによるハイブリット形式で実施いたしました。

加藤茂夫新学部長様、大庭昌昭研究科長様のご臨席を賜り、教育実践学研究科生五名への奨学金授与、並びに本年度の事業計画等の承認を得ることができました。五十嵐キャンパスの教育学部棟改築完了間近の様子や卒業生の教員採用率が八十%になったこと、大学院の更なる充実などについてのお話もいただきました。七十五周年を契機に、支部や学科における「縦のつながり」や同期の会における「横のつながり」で『強い絆づくり』をお願いいたします。教育現場では、いじめ・不登校、働き方改革、教員の不足、人間関係の希薄化などの課題が山積していますが、私たち同窓会は、先輩方が築いてくださった歴史の重みを受け止め、同窓会再構築に向けて取り組んでまいります。どうか皆様のお力をお貸しください。

結びになりますが、本年度の全学同窓会の「交流会・講演会」を十月十七日（土）五十嵐キャンパスで実施します。当日は大学祭も開催しています。新しくなった教育学部の校舎見学ができます。詳細はホームページに掲載いたしますので、大勢の皆様、お誘い合わせの上ご参加ください。お待ちしております。

花鳥風月

三年前から、教育学部の授業を週一コマ、非常勤講師として担当させていただくこととなった。自分が学んだ教育学部に、立場を変えて非常勤講師として足を踏み入れることになるとは、何とも不思議な縁である。

ここ数年、教育学部は改修工事が行われており、外見はそのままに見えても、中は見違えるほどきれいになっている。昔、自分が見ていた内観が変わっていくことへの一抹の寂しさを感じながらも、すばらしい環境で学ぶことができる現在の学生を、少しくらいやましくも思う。

普段は小学校の教員として子どもの指導に当たっているが、大学では、その子どもにどのように指導していくかについての授業を行っている。これまでの経験や研究結果等、伝えられるものはすべて伝えたいと思っている。将来教員を目指す学生が、いつも目を輝かせながら熱心に授業に参加している様子を見て、胸が熱くなる思いである。

これからも教育学部の未来ある学生に、その先につながる力を付けることができるよう、教育学部同窓会員の一人として努めていきたい。（広報部 近藤 拓自）

情報
交換

情報
発信

新潟大学
教育学部同窓会
ホームページ



評議会報告

六月十三日(土)、新潟教育会館を会場に、教育学部長の加藤茂夫様、教職大学院から大庭昌昭教育実践学研究所長様、吉田隆特任教授様をご来賓にお招きし、同窓会の評議会が開催されました。昨年度同様、より多くの方が参加しやすいように、現地に加えてオンラインによる開催を導入して行われました。本部役員に加え多くの支部長や学科代表の参加がありました。

冒頭、臼杵勇人会長から会員へ向けて、同窓会活動に格別のご理解とご支援をいただいていること、昨年度の全学同窓会設立二十周年記念講演会・交流会の担当学部としての素晴らしい運営について感謝の言葉がありました。そして、令和九年度の教育学部同窓会創立七十五周年記念式典に向けて実行委員会を設け準備を進めていることが伝えられました。ぜひ、大勢の会員から参加をいただき、記憶にも記録にも残る式典にしていきたいという意気込みを語られました。



臼杵会長あいさつ

加藤茂夫教育学部長様からは、令和七年度の卒業生の動向についてお話を賜りました。教員への採用率が昨年度を上回り八十%を超え、一七八名の卒業生の中で、教育現場

で活躍する卒業生が増えているというよいお知らせをいただきました。さらに、複数の教員免許取得が必須となっている中、「教員になりたい」という強い意志をもって入学し、学んでいる学生が多いという、心強いお話を伺うことができました。



加藤教育学部長ご祝辞

大庭昌昭研究科長様からは、教職大学院が十周年を迎え、同窓会から大学院生に、学びを支援するためにこれまで奨学金をいただき、大きな力になっていることへの謝辞をいただきました。

大学院の改革が進む一方で、学校現場で修士や博士の学位を持つている人の割合が欧米と比べて少ないという現状が語られました。

そのような中、本学の教職大学院は、定員の二十名を満たし、「実践力を高める大学院」として教育現場の学校課題を様々な人と協働しながら解決していく学びを進め、理論と実践を回しながら地域のために力を尽くしたいというお話を賜りました。



大庭研究科長ご祝辞

その後、教職大学院二年次五名の院生へ奨学金の授与式が行われました。一年次の研究の成果が認められたものです。五名の方から、一年次の研究内容の概要が報告され、今後の研究に向けて力強い決意をいただきました。五名の院生の内容は、今年度の教育新報の中でも紹介させていただきま



奨学金の授与式

評議会では、令和七年度の会務報告、決算報告があり、令和八年度の本部役員が承認されました。続いて、今年度の活動の重点と各専門部の活動報告・活動計画、予算案の提案があり、いずれも全会一致で承認されました。

令和八年度の活動の重点(一部抜粋)

一 「同窓生の集い」の充実

- ・時代の要請にマッチした講演会の講師の選定、内容の充実を図る。

- ・参加の呼び掛けを強化し、懇親会で支部、学科組織の懇親を一層深め、絆強化のよい機会とする。

- ・令和九年度教育学部同窓会創立七十五周年を迎えるにあたっての準備を進める。

二 広報活動の充実

- ・より親しまれ、読み応えのある「教育新報」を目指し、内容の充実を図る。

- ・教育学部同窓会創立七十五周年を記念して工夫した特集記事の掲載を計画し、準備を進める。

- ・会員相互の情報提供及び情報交換の場として、ホームページの一層の活用・充実を図る。

三 組織の充実と強化

- ・各支部活動や学科の集まり、同期の会など、会員としての帰属意識の向上が図られるよう縦と横のつながりや絆を支援する。

- ・「同窓生の集い」への参加を呼び掛け、組織の充実と強化を図る。

四 大学との連携

- ・教員養成改革の動向を見守り、母校の発展のための助言や支援方法を工夫する。

- ・教育実践学研究所への奨学事業の継続と同科の発展のための支援を推進する。

- ・学生への支援並びに学部教官との情報交換・懇親を密にし、同窓会活動への参加を働き掛ける。

五 全学同窓会との連携

- ・全学同窓会と大学との共催で行う「講演会・交流会」への参加を呼び掛ける。

- ・全学同窓会賛助会員や新潟大学カールドの周知を図る。

- ・全学同窓会広報誌「雪華」への記事提供を行う。

(文責 広報部長 小林 肇)

「支部長会」「学科代表者会」の報告

令和八年六月十三日（土）、新潟教育会館で、「支部長会」「学科代表者会」を合同で開催しました（評議会終了後）。

会場の新潟市から離れた地域の方からもたくさん参加していただけるように、オンラインでも参加できるように準備しました。

会議の中では、支部や学科のつながりや活動の状況、同窓会活動を進めていく上でのやりがいや課題について、様々なご意見をいただきました。

今後の同窓会活動の活性化や令和九年度に予定されている「教育学部同窓会創立七十五周年記念式典・記念祝賀会」の成功につながるヒントがたくさんありました。

支部長のみなさんからは、次のようなご意見をいただきました。

- ・学校でも支部でも、新潟大学教育学部の同窓生が占める割合が、年々低下している。そのような中で、かつてのような連帯意識を維持することに難しさを感じている。
- ・各支部とも、組織づくりで最も大切な名簿の提出や会費の納入が滞っている学校がある。人事異動等に伴い、学科代表者が交代する際は、業務の引継ぎを確実に行うことが大切である。
- ・支部長の引継ぎについても同様のことが言える。当事者同士の引継ぎだけに任せず、年度当初のうちに、本部事務局によるオンライン説明会を行うなどの工夫をしてみてはどうか。
- ・支部長として、何らかの働き掛けを行いたいと考えているが、校長が同窓会員ではない学校も増えていて、同窓会員の有無を確認したり、学科代表と連絡を取ったりするのも遠慮がちになってしまふ。

学科代表者のみなさんからは、次のよう

なご意見をいただきました。

- ・「大学と現場をつないでください」と言われ、学科代表者の役を引き継いだが、どこの学校に学科の出身者がいるのかを把握することが難しく、会員名簿の整理すら十分にできていない状況である。
- ・間もなく退職を迎えるので、若い世代への引継ぎを考えているが、同窓会活動の意義や目的について理解してもらえず、依頼してもなかなか受けてくれる人がいないので困っている。

- ・年に一回、「学科の集い」を行っている。みなさんが喜んでくれていることがやりがいにつながっている。大学の先生の紹介もあり、少しずつ若い世代の人たちも「集い」に来てくれている。「創立七十五周年」を機に、つながりをさらに深めていきたい。

意見交換を通して、支部や学科で同窓会活動を進めていく上でのやりがいや難しさについて共有されました。

また、参加してくださった支部長、学科代表者のみなさん一人一人が、同窓会活動を推進する立場としての責任を感じ、「同窓会創立七十五周年」を機に、同窓生同士のつながりを再構築したいと願っていることが分かりました。

同窓会活動を支えるのは、自分たちが卒業した新潟大学教育学部への「誇りと愛着」だと思います。それは、同窓生同士のつながりから生まれます。まずは、支部長、学科代表者同士がつながりを深め、それをより多くの同窓生へフィードバックしていくことが必要なのではないでしょうか。

いよいよ令和九年度は「同窓会創立七十五周年」を迎えます。さらに多くの支部長・学科代表者のみなさんからこの会議に参加していただき、機運が一層高まることを期待しています。

（組織部長 古井丸 裕三）

教職大学院生 実践報告

「解釈」を「分析」によって確かにする
物語教材の指導法
教育実践コース 中野 裕己（新潟大学附属新潟小学校）

1. 問題の所在と研究の目的

小学校国語科の物語指導において、文章の理解過程は、個人の生活経験と結びつく独創的な「解釈」と、客観的な分析コードに基づく「分析」に整理される。実際の授業では、根拠を問う「分析」の指導が特定のテキストを指摘させることに終始し、児童の豊かな「解釈」が淘汰されてしまうという課題があった。

本研究は、鶴田（2010）の理論を基盤とし、「分析」を通して自ずと「解釈」が立ち上がる指導法の構築を目的とする。具体的には、視点を読み解くことで物語場面を「視覚化」させ、児童の独創的な読みをテキストに接地させながら確かにすることを目指した。

2. 研究の方法と実践の展開

小学校第4学年の教材「ごんぎつね」を対象に、全8時間の単元を実施した。視点を読み解く分析を促す手立てとして、作風の異なる3種類の絵本の比べ読みを導入した。

特に、俯瞰的な構図を持つ黒井氏の絵本を提示することで、「誰がどこから見ているのか」という語り手への意識を喚起した。教師は一問一答を避け、児童が

自律的に絵の描写と叙述の整合性を検討し、文章情報を映像として視覚化できる環境を整備した。

3. 実践の分析と考察

児童の発話と記述の分析から、①語り手の認知、②視座・視野の検討、③文章情報の視覚化、という過程を経て「解釈」が深まることが明らかになった。

抽出児童「はやね」の変容を見ると、初読時にはごんの気持ちを「謝罪」という一面的な言葉で捉えていた。しかし、視覚化を通じて兵十側に視座を置き、倒れているごんや土間の栗を視野に収めて場面を捉え直したことで、兵十が償いに気づいた事実を確認した。その結果、最終的に「償いに気づいてもらえた喜び」と「撃たれた悲しみ」が混在する「複雑な気持ち」という多面的で質の高い解釈へと辿り着いた。この姿は、「分析」が「解釈」を確かなものにする有効な足場となることを示している。

4. 成果と今後の課題

本研究は、教師の指示に頼らず、絵本の提示によって児童の内発的な分析を駆動し、独創的かつテキストに接地した読みを実現した点に成果がある。今後の課題は、絵本の比較が難しい他教材への汎用性を高める手立ての検討や、より多くの事例を通じた再現性の検証である。

中学校のSSRにおける教職員の協働支援 学校経営コース 渡邊 正彬（新潟市立上山中学校）

近年、中学校では不登校生徒が増加し校内教育支援センター（SSR）の設置が全国的に進められている。本研究の目的は、SSRに通室する生徒一人ひとりを支える校内支援のあり方を、教職員の協働体制と関連づけて検討することである。生徒および学校にとってSSRがもつ意義を明らかにし、生徒が安心して登校し、自分のペースで学習しながら他者との関わりを広げられる支援モデルの構築を目指す。令和7年度は、公立中学校3校のSSR運営担当教諭を対象に半構造化インタビューを実施し、通室生徒の状況、支援内容、教室環境、教職員の支援体制について聴取した。

各校に共通する支援の柱として第一に、生徒が体調や気持ちに応じて学習場所や課題の種類・量、参加形態を自ら選択できる環境を整える「自己選択・決定の支援」が確認された。第二に、学年や得意・苦手教科の実態に応じて達成可能な目標を本人と相談しながら設定し、日々の取組を丁寧に記録して肯定的にフィードバックすることで、成功経験を積み重ね、自信を育む支援が行われていた。第三に、指導や行動修正を急ぐのではなく、傾聴を重視した受容的な関係を構築し、

生徒が安心して過ごせる環境づくりが重視されていた。一方、課題として、保護者・担任との情報共有、関係機関との連携・報告など調整業務の集中、全時間帯への教員配置や専用スペース確保の困難に代表される人的・物的資源の不足、教室復帰の位置づけや学習支援と心理支援の優先順位をめぐる教職員間の認識のばらつきが挙げられた。各校では、部会による情報集約や管理職や生徒指導主事による横断的調整、時間割の工夫、ICTを活用した資料配信、職員会議での方針共有、担任のSSR訪問など多様な工夫で対応していた。

考察

SSRは生徒にとっての安心できる居場所であると同時に、教職員にとっても教室では捉えにくい生徒の状態を継続的に把握できる場でもある。生徒の学びと生活を支えると同時に、学校全体の支援体制を育てる場としての意義を併せもつと考えられる。支援の継続性と一貫性を学校全体で担うには、記録の共有・支援会議の活用・調整役の明確化など組織的な協働体制の整備が必要である。今後の課題は、安心感、自己決定を支える支援を基盤としつつ、生徒相互の適切な関わりを促す活動、学習を検討し、SSRにおける生徒の学びの質を高めることである。

教職大学院生 実践報告

道徳不活性化に着目した教育的介入が生徒の規範意識に及ぼす影響—高不活性化群における認知の適正化プロセスを中心に— 教育実践コース 小林 一美（新潟市立五十嵐中学校）

1. 問題の所在と研究のねらい

学校現場では、いじめの未然防止に取り組んでいるが、依然として認知件数は多い傾向にある。勤務校においてもいじめにつながりかねないトラブルがある。生徒の多くは「いじめは悪い」という規範を保持しているが、報復や集団維持といった具体的な文脈では攻撃的行動を容認する傾向がある。そこで、道徳の授業での本音の議論を通して、身に付けつつある道徳性が機能しない理由について考え、攻撃的行動の未然防止につなげることを目指した。

2. 研究の概要

〈研究方法〉

勤務校の生徒を対象に、道徳不活性化を学ぶ道徳の授業を実施した。授業前後の質問紙調査と生徒の振り返りを分析し、効果を検証した。

3. 理論的枠組み：道徳不活性化

道徳不活性化とは、内面化された道徳基準に反する行動をとりながらも、歪んだ考え方によって罪悪感をもたずに行動できる心理プロセスである（Bandura,1999）。

4. 介入：道徳不活性化に着目した道徳授業

開発教材『“正しさ”とは何か～X校柔道部の暴力事件で考える～』を用いた。規則を破った後輩部員への暴力事件を題材とし、先輩の“過剰な正義感”に焦点を当てる。特定の場面で攻撃的行動を正当化してしまう認知の歪みに気づき、それを適正化（再活性化）

させる方法について議論した。

5. 生徒の反応：「葛藤」と「内省」の芽生え

実践後、「どんな場面でも他者を傷つけたり無視したりしてはいけない」という判断に至った生徒が多く見られた。一方、「どちらともいえない」という判断の揺らぎを見せる生徒も増加した。この「迷い」は、安易な正当化をやめ、自らの考えを見つめ直そうとする「内省的知性」の芽生えと捉えられる。

6. 検証結果：高不活性化群の変容

道徳不活性化尺度を用いて分析した結果、全体では大きな変化は見られなかった。しかし、事前調査で35点以上の「高不活性化群」に着目すると、介入後道徳不活性化得点が有意に低下した（ $p=.041$ ）。

7. 結論と意義：スコア低下が意味するものと教育的示唆

高不活性化群におけるスコア低下は、「都合の良い言い訳（正当化の論理）」を問い直し、攻撃的な行動選択の前に立ち止まって考える「内省的な状態」への変化を示唆している。

本研究の意義は、生徒が自らの認知の歪みを自覚する機会を提供し得る点にある。葛藤と向き合う授業はいじめ加害リスクを抱える生徒が行動に移る手前で踏みとどまるための「歯止め」となり得ることが示唆された。

8. 今後の取組と課題

今後は、変容の持続性や行動レベルへの影響について検証を進める必要がある。自らの「正しさ」を問い直し、揺れ動く葛藤を抱えながら、仲間とともに考え続ける姿勢をもつことこそが、いじめの克服に向けた確かな一歩となる。継続的な実践と理論的検討を重ねていく必要があると考える。

令和8年度 専門部活動計画

研修部

部長 坂内 徹

一 研修部活動計画

研修部では、同窓生が親睦を深めるとともに自己の人間的な資質を高めることを目的に本年度事業を次のように計画しました。講演会後に懇親会も予定しております。

多くの皆様の参加を心よりお待ちしております。

二 事業内容

「第五十一回 同窓生の集い」

- ・期 日 令和八年九月十二日（土）
- ・会 場 ホテルグローバルビュー新潟
- ・講演会 午後四時四十五分

～午後六時十五分

（受付午後四時～）

- ・演 題 「学級経営を学ぶ意味」
- ・講 師 赤坂 真二 様

上越教育大学教職大学院教授

- ・懇親会 午後六時三十分

～午後八時三十分

申込等詳細は十ページをご覧ください。

広報部

部長 小林 肇

一 基本方針

- （一）同窓会の活動や会員の声、大学の状況を積極的に紹介するとともに、会員のニーズに応える紙面づくりを目指すことで、役に立ち、取っておきとなる広報誌を目指す。
- （二）大学の取組等に焦点を当てて広報活動することで大学と同窓会の連携を推進する。
- （三）年間二回、四色刷りカラー印刷を継続して発行する。

二 活動内容

「教育新報」年間二回発行

- 第一九一号（七月二十日発行予定）

巻頭言、令和八年度専門部活動計画
同窓会本部役員・支部長・学科代表
一覧、令和七年度決算報告、令和八年度予算、大学コーナー、教職大学院実践報告、花鳥風月等

- 第一九二号（二月二十日発行予定）

巻頭言、花鳥風月、「同窓生の集い」
報告、学科や支部の活動紹介、学校
紹介、（小・中・特支学校）、会員の
広場等

組織部

部長 古井丸 裕二

一 基本方針

- （一）支部長や学科代表者との連携を図りながら、教育現場を中心に活躍する会員同士のつながりを維持、発展させるとともに、会員としての所属意識を高める。
- （二）「教育学部同窓会創立七十五周年記念式典・記念祝賀会」の開催に向けて、「同窓生の集い」などの事業への積極的な参加を促し、機運の醸成を図る。

二 活動内容

- （一）「支部長会」の開催 六月
- （二）「学科代表者会」の開催 六月
- （三）「同窓生の集い」（研修部事業）への参加促進 九月
- （四）「教育学部同窓会創立七十五周年記念式典・記念祝賀会」の開催に向けての取組（実行委員会の方針に基づく活動）

三 その他

より多くの支部や学科で「集い」の活動が行われるように、組織づくりや運営方法についての情報共有や活動を支援する。

交流部

部長 諸橋 智

一 基本方針

- 大学（大学院）の学生・教職員、同窓会会員（現任教員・退職者）の交流の場を設けることにより、情報交換を行い、連携・親睦を深める。

二 活動内容

- （一）新潟大学教育学部並びに教育実践学研究科教職員との懇談会・懇親会

学部、教育実践学研究科の現状や取組、卒業・修了生の現状、同窓会活動について情報交換をする。

- ①日時 令和九年一月二十一日（木）
- ②会場 アートホテル新潟
- （二）第五十一回同窓生の集い

- ・研修部との共同開催
- ・組織部は懇親会を担当

三 その他

- （一）「教育学部同窓会創立七十五周年記念式典・記念祝賀会」に関する担当業務推進
- （二）全学同窓会をはじめ教育関係団体との交流促進
- （三）休止中のカミングホームデイに代わるものの検討を行う。

令和8年度 同窓会本部役員

☆印は新役員

役 職	氏 名	支 部	校名など
会 長	臼杵 勇人	新 潟 東	自宅
副会長	小林由希恵	新 潟 西	新通つばさ小学校
	脇川 恭子☆	阿 賀 野	堀越小学校
	野上 孝☆	長 岡 西	大島小学校
	灰野 仁	新潟中央	高志中等教育学校
事務局	杉山 和敏	新 潟 西	教育学部同窓会事務局
	長島 裕		
専 門 部	研修部	◎坂内 徹	新潟江南 亀田東小学校
		○小泉 慎子	新潟中央 鳥屋野小学校
		志田江利子	新 潟 南 庄瀬小学校
		三浦美也子☆	新 潟 東 下山小学校
		相馬 朋美☆	聖 籠 聖籠町教育委員会
	広報部	◎小林 肇	新 潟 北 太夫浜小学校
		○音田 和行	新潟江南 横越小学校
		高橋 新一	新 潟 北 木崎小学校
		近藤 拓自☆	新 潟 西 五十嵐小学校
	組織部	山本 桜平	新 潟 西 小針小学校
		◎古井丸裕三	新潟中央 万代長嶺小学校
		○平田 伸一	新 潟 北 松浜小学校
		高井 進一☆	新 潟 南 根岸小学校
		大門 克寿☆	新 潟 東 山ノ下小学校
		江畑 正平☆	五 泉 川東小学校
		山崎 哲也☆	新 発 田 外ヶ輪小学校

役 職		氏 名	支 部	校名など
専 門 部	交 流 部	◎諸橋 智	新潟中央	日和山小学校
		○藤塚 静治	新潟中央	新潟市教育相談センター
		永井 高志	新潟中央	新潟市こども創造センター
		古川 智子	新潟中央	女池小学校
		藤田 凌	新潟西蒲	漆山小学校
監 事		石塚 智久	新潟中央	新潟市教育委員会総務課
		川又 由香	新 潟 北	岡方第一小学校
		牧野淡紅恵	新 潟 東	下山中学校
顧 問		中川 幸次	県 外	自宅
		大関 雄策	新潟中央	自宅
		磯辺 浩昭	新 発 田	自宅
		藤井 保男	新 潟 東	自宅
		斎藤寿一郎	新 潟 東	自宅
		佐藤 重勝	新潟秋葉	自宅
		安達 徹	新潟秋葉	自宅
	新潟大学 大学同窓会	理 事	臼杵 勇人	新 潟 東
運 営 委 員		山下あい子	新潟西蒲	自宅
		笛木 晶子	新潟西蒲	自宅
		松井 裕美	新 潟 南	南区教育相談室
		岡村 浩	大 学	新潟大学経済科学部

令和8年度 同窓会学科代表 ☆印は新代表

	学科名	学科代表	校名など
1	国 語	三村 孝志	自宅
2	地 理	篠木 格	上所小学校
3	歴 史 研 究 室	佐藤 昌寿	小針小学校
4	経 済	小庄司一泰	新潟市教育委員会学校支援課
5	哲 学	清野 真輝	新津第二小学校
6	社 会	土田 宏美	桜通小学校
7	算 数 ・ 数 学	小泉 浩彰	上山中学校
8	物 理	茂呂 良彦	自宅
9	化 学	羽鳥 益実	下川西小学校
10	生 物	八百板恵理子	関屋小学校
11	地 学	横山 雅史	自宅
12	英 語	槁本 敏郎	高田高等学校
13	音 楽	桜井 直美	新潟市総合教育センター
14	美 術	永井 高志	新潟市こども創造センター
15	保 健 体 育	田村 裕司☆	新潟市立万代高等学校
16	家庭〔萌木会〕	太田 優子	自宅
17	職 業 指 導	松村 明彦	自宅
18	教 育	山岸 真夫	自宅
19	教 育 心 理	岡田 義則	東特別支援学校
20	技 術	倉島 陽介	新潟市教育委員会学校人事課
21	特 別 支 援 教 育	参宮 美樹	附属特別支援学校
22	養 教 特 別 別 科	大滝 郁子☆	県立村上特別支援学校
23	幼 児 教 育	近藤 和徳	新潟市教育委員会教育総務課
24	学社ネットワーク	小柳加奈子	自宅
25	生 活 科 学	遠山麻依子	光晴中学校
26	生 活 シ ス テ ム	大森 山	春日中学校
27	健 康 ス ポ ー ツ	大口 良平	妙高小学校
28	書 道	岡村 浩	新潟大学経済科学部

令和8年度 同窓会支部長 ☆印は新支部長

地 域		支 部	支部長	校名など
上 越	1	上 越	鹿目 功二	上越特別支援学校
	2	長 岡 東	平野 秀穂	中越教育事務所
	3	長 岡 西	相澤 勇弥	青葉台小学校
	4	三 条	蛇谷 直樹☆	上林小学校
	5	柏 崎・刈 羽	加藤美奈子	桜通小学校
	6	小 千 谷	野住 明美☆	総合支援学校
	7	加 茂	荒井 純	須田小学校
	8	十日町・津南	南雲 恵子	南中学校
	9	見 附	川上 節夫	見附小学校
	10	燕	坂内 克明	燕西小学校
	11	魚 沼	佐藤 宏☆	須原小学校
	12	南 魚 沼	瀧本 樹☆	大崎小学校
	13	弥 彦	*	*
	14	田 上	杉山 一郎	田上小学校
	15	湯 沢	阿部 隼英	湯沢中学校
	16	出 雲 崎	*	*
中 越	17	新 潟 北	高橋 新一☆	木崎小学校
	18	新 潟 東	松島慎一郎	中野山小学校
	19	新 潟 中 央	畑 智☆	紫竹山小学校
	20	新 潟 江 南	金 洋輔	東曽野木小学校
	21	新 潟 秋 葉	飯田 厚	荻川小学校
	22	新 潟 南	木村 杏子☆	根岸小学校
	23	新 潟 西	林 なおみ	黒崎南小学校
	24	新 潟 西 蒲	村上 大樹	中之口西小学校
	25	新 発 田	平井 涼☆	七葉小学校
	26	村 上	仙田 満	村上小学校
	27	五 泉	奥山 順一☆	巢本小学校
	28	阿 賀 野	石塚 晃一	安田中学校
	29	胎 内	山沢 正仁	胎内小学校
	30	聖 籠	臼井 政之	山倉小学校
	31	阿 賀 賀	郡司 哲朗☆	三川小学校
	32	関 川	金子 浩	関川中学校
	33	粟 島 浦	遠田 茉央☆	粟島浦中学校
佐 渡	34	佐 渡	福井 晴人	金井中学校

令和 7 年度 一般会計決算報告

1 収入の部

項 目	R 7 年度収入額	R 7 年度予算額	比 較	摘 要
1 繰 入 金	7,000,000	7,000,000	0	第四北越銀行 総合会計から繰入れ（前年度残金から）
2 雑 収 入	250,293	0	250,293	利息、返金処理分
合 計	7,250,293	7,000,000	250,293	

2 支出の部

(▲は残額)

項 目	R 7 年度執行額	R 7 年度予算額	比 較	摘 要
1 会 議 費	46,063	40,000	6,063	会計監査、第 1・2 回本部会、評議会
2 旅 費	112,540	120,000	▲ 7,460	会計監査、本部会、評議会（項目の部開催の旅費は各部での執行とする）
3 助 成 費	216,190	200,000	16,190	学科助成、支部助成、同期の会助成
4 事 務 局 費	1,680,815	1,600,000	80,815	通信・発送費、インク等消耗費、電話代、光熱費、封筒印刷代、印刷紙代等
5 研 修 費	381,815	380,000	1,815	同窓生の集い企画・運営経費、旅費
6 広 報 費	544,160	600,000	▲ 55,840	機関紙発行 2 回、記事謝礼 2 回、パンフNo. 15 作成
7 組 織 費	11,330	20,000	▲ 8,670	組織部会議費
8 交 流 費	229,575	200,000	29,575	交流会企画運営費・経費・旅費
9 大学・学生支援費	560,000	630,000	▲ 70,000	研究会助成、学生支援、 附属校研究発表会祝儀 卒業祝賀会助成
10 奨 学 金	750,000	750,000	0	大学院教育実践学研究所生奨学金（150,000 × 5）
11 全 学 同 窓 会 費	583,300	530,000	53,300	全学同窓会負担金、全学役員旅費、全学交流会旅費及び懇親会補助
12 人 件 費	1,800,000	1,800,000	0	事務局報酬 2 名分
13 その他予備費	115,110	130,000	▲ 14,890	全学教職支援センター助成、新潟教育会助成、新大祭助成、群馬県支部祝儀等
合 計	7,030,898	7,000,000	30,898	

3 残高の部 7,250,293 - 7,030,898 = 219,395 円 *残金は年度末に総合会計に繰り入れました。

令和 7 年度 総合会計決算報告

1 収入の部

(▲は予算に対して減)

項 目	R 7 年度収入額	R 7 年度予算額	比 較	摘 要
1 繰 越 金	27,401,717	27,401,717	0	前年度繰越金（第四北越銀行 総合会計 前年度末残金）
2 学 校 会 員 会 費	1,398,412	1,500,000	▲ 101,588	会費－振込手数料－振込料（880）－印字手数料（3,220）
3 個 人 会 員 会 費	76,486	80,000	▲ 3,514	会費－振込手数料
4 永 年 会 員 会 費	3,695,899	3,700,000	▲ 4,101	会費－振込手数料－印字手数料（1,720）－振込料（880）
5 繰 入 金	219,395	0	219,395	一般会計への繰出金に残金があるので、総合会計に戻した額
6 雑 収 入	46,584	0	46,584	利息（8 月・2 月及び定期利息）
合 計	32,838,493	32,681,717	156,776	

2 支出の部

項 目	R 7 年度執行額	R 7 年度予算額	比 較	摘 要
1 一 般 会 計 繰 出 金	7,000,000	7,000,000	0	令和 8 年度当座金として、一般会計へ
合 計	7,000,000	7,000,000	0	

3 残高の部 32,838,493 - 7,000,000 = 25,838,493 円 *残金は、総合会計に繰り越します。

大学教官の異動

(昨年度の七月以降)

◎学部を去られた先生

教授 神村 栄一(教職大学院)

准教授 橋本 佳恵(教育基盤)

教授 宇野 哲之(音楽科)

教授 清水 研作(音楽科)

教授 丹治 嘉彦(美術科)

教授 柳沼 宏寿(美術科)

教授 相庭 和彦(教職大学院)

教授 酒井 武志(教職大学院)

教授 野住 明美(教職大学院)

准教授 片桐 彩(美術科)

准教授 宇賀神 一(学校教育学)

特任教授 江口 滋(特別支援教育)

准教授 清野 佳子(教育基盤)

准教授 金田 良哉(教職大学院)

准教授 川上 綾子(教職大学院)

採用

採用

採用

採用

採用

採用

採用

採用

採用

採用

採用

採用

採用

採用

採用

採用

採用

採用

採用

採用

(敬称略)

令和8年度 一般会計予算

(▲は、前年度比較減)

1 収入の部

項 目	R 8 年度予算額	R 7 年度予算額	増 減	摘 要
1 繰 入 金	7,000,000	7,000,000	0	総合会計から繰入れ
2 雑 収 入	0	0	0	
合 計	7,000,000	7,000,000	0	

2 支出の部

項 目	R 8 年度予算額	R 7 年度予算額	増 減	摘 要
1 会 議 費	50,000	40,000	10,000	本部会、評議会、会計監査会等の会場費、お茶代
2 旅 費	120,000	120,000	0	本部会、評議会、監査会旅費
3 助 成 費	220,000	200,000	20,000	学科助成、支部助成、同期の会助成、学科の集い助成
4 事 務 局 費	1,700,000	1,600,000	100,000	郵送料、電話・光熱費、印刷代、消耗品等
5 研 修 費	400,000	380,000	20,000	集い企画運営費等（会場費、講師謝礼、参加助成等）
6 広 報 費	550,000	600,000	▲ 50,000	機関紙「教育新報」発行代、同窓会パンフ作成代
7 組 織 費	20,000	20,000	0	運営諸経費
8 交 流 費	200,000	200,000	0	交流会企画運営費
9 大学・学生支援費	360,000	630,000	▲ 270,000	卒業論文発表会助成、卒業制作発表会助成、卒業祝賀会助成等
10 奨 学 金	750,000	750,000	0	奨学生 5 名
11 全 学 同 窓 会 費	550,000	530,000	20,000	負担金、全学理事会・運営委員会旅費等
12 人 件 費	1,800,000	1,800,000	0	事務局報酬 2 名
13 その他 予 備 費	280,000	130,000	150,000	全学教職センター助成、創立 75 周年経費
合 計	7,000,000	7,000,000	0	

令和8年度 総合会計予算

(▲は、前年度比較減)

1 収入の部

項 目	R 8 年度予算額	R 7 年度予算額	増 減	摘 要
1 繰 越 金	25,838,493	27,401,717	▲ 1,563,224	前年度繰越金（第四北越銀行総合口座前年度末残金）
2 学 校 会 員 会 費	1,400,000	1,500,000	▲ 100,000	会費－振込手数料
3 個 人 会 員 会 費	80,000	80,000	0	会費－振込手数料
4 永 年 会 員 会 費	3,600,000	3,700,000	▲ 100,000	会費－振込手数料
5 繰 入 金	0	0	0	*一般会計への繰出金に残金が出た場合、年度末に繰入
6 雑 収 入	0	0	0	銀行利息など
合 計	30,918,493	32,681,717	▲ 1,763,224	

2 支出の部

項 目	R 8 年度予算額	R 7 年度予算額	増 減	摘 要
1 一 般 会 計 繰 出 金	7,000,000	7,000,000	0	
合 計	7,000,000	7,000,000	0	

事務局だより

□新しい歴史のスタートに向けて③
来年度は、教育学部同窓会創立七十五周年です。コロナ禍を克服した私たちは、今こそ集う喜びと意味を再確認し、会員相互の絆を強め、継続可能な同窓会活動を展開していきたいと思っています。是非ご協力ください。それでは、現在決定していることの一部をお知らせします。

① 実行委員会の組織（一部）
・実行委員長 小林由希恵
（副会長 新潟市立新通つばさ小学校）
・副実行委員長 脇川 恭子
（副会長 阿賀野市立堀越小学校）
・副実行委員長 野上 孝
（副会長 長岡市立大島小学校）
・副実行委員長 灰野 仁
（副会長 新潟市立高志中等教育学校）
② 「集い」の講師（三回シリーズ）
「同窓生の集い」は、今現場で喫緊の課題である特別支援、不登校、学級経営に造詣の深い先生方に講師を依頼しております。
・7年度 有川 宏幸 様
（新潟大学教育学部副学部長）
・8年度 赤坂 真二 様
（上越教育大学教職大学院教授）
・9年度 長澤 正樹 様
（元新潟大学教育学部教授）
懇親会・祝賀会も計画しております。どうか皆さんで声を掛け合ってください。楽しく語り合いましょ。

大学の
コーナー

学校現場で子どもの命を守る

地震・津波の防災教育と研究拠点

新潟大学教育学部准教授 高清水 康博

地震津波は海底の断層がずれ動くことで発生し、普通の波とはまったく異なる性質を持つ波です。その規模は断層の面積とずれの大きさ（変位量）で決まります。普通の波が海面付近だけの動きであるのに対し、津波は海底から海面までの海水全体が動きます。伝播速度は水深の0.5乗に比例して深いほど速く、波高は水深の0.25乗に反比例して岸に近づくほど高くなります。この性質は到達時間にも表れ、2011年の津波では、沖合が深い三陸海岸にはおよそ30分、遠浅の仙台湾沿岸には1時間ほどで到達しました。

ところでこの津波では、各学校での対応の違いによつてその結末が分かれましました。次にそれらの事例を紹介します。

石巻市の大川小学校では、多くの児童と教職員が犠牲になりました。学校や市教育委員会は、津波を想定した具体的な避難場所や経路を危機管理マニュアルに定めていなかったなどとして、仙台高裁判決は宮城県と石巻市に約14億3600万円の賠償責任を認め、後に最高裁で確定しました。一方で、教職員や子ども達が自ら考えて避難し、全員が助かった学校もあります。その代表例が「釜石の奇跡」と呼ばれる事例です。釜石市の鵜住居小学校と釜石

東中学校の子ども達は、決められた避難場所に着いた後も「もっと安全な場所はどこか」を自分たちで考え、地域の住民らとともにさらに高台へ逃げて助かりました。浪江町の請戸小学校でも、教職員、児童らは学校から約1.5km離れた大平山を目指して避難し、全員が無事でした。いずれも太平洋側の話ですが、日本海側では津波がさらに切迫した形で現れ、それに応じた避難が求められます。

新潟をはじめとする日本海側では、地震・津波の現れ方が太平洋側と大きく異なります。約2000万〜1500万年前に日本海が成立したときの正断層が、現在は逆断層として活動しています。これらは高角度逆断層

であるため、同じ地震規模であっても上下方向の動きが大きく、津波が大きくなりやすいのが特徴です。典型的なプレート沈み込み境界ではないため、一つ一つの断層の長さは短いものの、北海道から九州まで60条の海底活断層が想定されています。特に海岸線に近い断層が動く数分から十数分で津波が来襲するため、校庭に集まって点呼をとり、ゆつくり判断する余裕はありません。普段とは異なる大きな揺れを感じたら、直ぐに避難することが鍵と

なりそうです。ところで日本海側では実際に、学校行事の最中に子ども達が犠牲になる惨事がありました。

昭和58年（1983年）の日本海中部地震では、津波によつて100名が亡くなり、その中には行事中の小学生も含まれていました。男鹿半島の加茂青砂海岸へ遠足に来ていた合川南小学校の児童45名の内の13名です。子ども達は地震発生時、移動中のバスの中にいて揺れに気づきにくく、また地震や津波の情報を得る間もないまま、浜辺で津波に襲われました。日本海側の学校現場でこのような犠牲を二度と繰り返さないこと、それが私たちの願いです。

そこで私の研究室では『学校防災教育研究拠点』を立ち上げました。究極の目標は、「自然災害によつて教育現場で命を落とす人をゼロにすること」です。地域の中の学校を研究・実践のフィールドとし、地震・津波・洪水といった新潟の地域特性に根ざした自然災害モデルと防災教育を構築して、地域防災の中で主体的に考え行動できる力を育む、新しい防災教育の実装を目指しています。

その実践の一つが、市内の小学校で行っている、教育学部の学生（当研究室の学生）による津波防災の授業です。子ども達に「津波つてどんな波だろう」と問いかけ、思い描く姿を絵に描いてもらうと、さまざまな形が現れます。

その多くは、普段の風波を大きくしたような形で、ちょうど葛飾北斎の「神奈川沖浪裏」のような、高く巻き上がる大波のイメージです。しかし、あの大波は波長の短い風波であつて、津波ではありません。本物の津波は、数m高い海面が前面いっぱいになり、滝のような段差を伴う「段波」となつて押し寄せることがあります。この性質は、一般の方や子ども達にはまだあまり知られていません。

そこで授業では、3.6mの実験水路でさまざまな波を再現し、普通の風波と津波の違いを実際に観察してもらいます。子ども達は、津波が内陸の奥深くまで遡上し、強い力を持つ流れであることを、実感をもつて理解します。

正しい科学的な知識を根拠として、自分自身と、周りの友達や家族、地域の人々の命を守る児童・生徒を育てること、その一步一步の積み重ねこそが、教育現場の犠牲をゼロにする道だと信じています。地道な取り組みですが、地域に根ざしながら、世界に共通する防災教育の課題の解決にも貢献していければと考えています。

第51回 同窓生の集い

講演会

【演題】

学級経営を学ぶ意味

日時

令和8年 9月12日(土)

16:30より

(16:00受付開始)

講師

上越教育大学教職大学院学校教育研究科
教授

赤坂 真二 氏



赤坂真二（あかさか・しんじ）。国立大学法人上越教育大学教授。
秋田公立美術大学非常勤講師。19年の小学校勤務を経て2008年
4月より現所属。学校心理士、ガイダンスカウンセラー・スーパーバイザー、
日本学級経営学会共同代表理事、日本授業UD学会理事、NPO法人
全国初等教育研究会 JEES 理事。著書に『学級経営「超」入門』、
『個別最適な学び×協働的な学びを実現する学級経営』、『資質・能力
を育てる問題解決型学級経営』、『アドラー心理学で変わる学級経
営』、『学級経営大全』（明治図書）、『赤坂版「クラス会議」完全マニ
ュアル 人とながつながって生きる子どもを育てる』（ほんの森出版）など。

貴重な講演の機会です。皆様のお越しをお待ちしております。

場所

ホテルグローバルビュー新潟

〒950-0901 新潟県新潟市中央区弁天1丁目2-4

TEL. 025-244-5151

申し込み＆問い合わせ先

新潟大学教育学部同窓会事務局

TEL&FAX 025-263-6760

MAIL dousou@ed.niigata-u.ac.jp

※火曜から金曜までの12:45から16:45の間にお願いたします。
※申し込み多数の場合は会場の都合上先着順とさせていただきます。

日程

受付 16:00～

開会式

16:30～16:45

講演会

16:45～18:15

懇親会

18:30～20:30

入場料

無料

懇親会

新潟大学教育学部
の卒業生の方は、是非
懇親会にもご参加くださ
い。参加を希望される方
は8月21日までにご
連絡ください。参加費は
7,500円です。

(同窓生には一部補助
をします。)

主催

新潟大学教育学部
同窓会事務局

後援

新潟市教育委員会
(申請中)